

石襍志

馬矢

一	鬼神餘論	七	地名の訛謬
二	蟬丸	八	四時代謝
附	関東	九	ふをる河
三	悪禪師	十	とく本
四	正儀義隆	附	長篠
附	一休詠河	士	字體
五	八幡太郎	附	俗字考
六	浅草事實		

卷之三止

15
1493
3



45
1493
3

養石雜誌卷之三

江戸

義彦軒

唯澤解

瑣吉述

鬼神餘論



鬼神の論いさゝか盡さぬゆゑにばらばられを述べて童叟のたゞせり

疫鬼瘴鬼とのりありのあり疫鬼の俗よりの疫病神瘴鬼の俗よりの瘡癩神

あり和名鈔に瘴鬼邪鬼窮鬼ホをとり窮鬼の人の家よりあるを執と

ひんせ倍貧乏神といふ是あり和名鈔に瘴鬼邪鬼瘡癩神云昔頼

項有子亡去而為疫鬼其一者居江水是為瘴鬼

和名夜也或於邪鬼日本紀云邪鬼和名安之窮鬼遊仙窟云

窮鬼師説を萬とつりて大陽の毒あり一時の氣運よ来ト

流行と頼項の子亡去疫鬼とつるとのりありの秘安の疫癩ハ冬

きて春夏の間最盛なりとの寒は傷らるりの春夏大陽の毒ハ

早稲田 大学 図書館
35.2.1
蔵書

1. 誘引の故に私漢除夜の難より疫鬼を驅とり我俗を疫
うつとの後遂に災厄の厄とするのの堪えり唐山より立春の月土牛を造
るる農変を造る 天朝亦られぬ故に大寒の日夜半に陰陽寮
土牛童子の像を造る門には立延喜式に土偶八十二枚 高各 土牛十二枚
と見えりその数一身十二箇月を表する故に土牛の背黄赤白黒を青夏秋
冬東西南北の色に隨ひてそれを表すと亦水鏡文氏紀に慶雲二年とあり
あつて世の中らちらうとてくらひ人々は追儼といふはらうとあり
と見え亦慶雲二年天下疫癘盛なり人民多し失くは土牛をほくを
追儼といふは始なりと公夏根えりも記されたり吉田の疫塚とれとの餘
故に毎歳節分の夜吉田神祇官より庭上を塚を築くこれを疫塚
といつてその塚正月十九日に至りて鮮去るを清祓といふ亦その日山城國八幡
の社頭より疫神を齎る亦その月十六日は伊勢國度會郡山田の御小獅子改

の神事あり亦二月十日高尾の法華會これを安良比花といふはらう
鼓らんと寂蓮の詠多しと見え是疫鬼を驅の姿なりといふこと
穢に至り止るなり夏越て七月に至り陽氣衰ふ故に秋これを穢
王を鬼ハ太陽の毒なりといひはらふなりはらうと見え疫鬼を又穢は但
一時の氣運に隨て流行するといふその穢在がたは陽衰るに至りて消
然と消る迹なり辟言ハ酒食の腐爛するといふ忽然と消る蠅の聚る小似り
人との酒飯を撤去する蠅も又隨て消るが如しなりと小蠅鳴悪神といふ
やとらるる病劇しれ時人往く疫鬼をふるふなりといふその穢と消るの穢
状一定なりといふは穢毒のあつて消るなりといふは穢毒のあつて消るなり
雲霧を起るは穢毒ハ山中の人との雲の起るを穢毒の穢毒なりといふは
これを穢るは穢毒ハ奇峯を穢るが如し瘧疫の人と通る熱邪内は蒸してその
毒外に散るといふ患者との疫鬼をふるふは穢毒を穢るが如し瘧疫の人と通る熱邪内は蒸してその

禍を避んことを求むが常々禱らば病とれ甚しく禱る鬼神を
おぼるる時あり凡夫その我れをりて禱らば鬼神のつらうれを
君子ハ人又禱らばをりて人の論を然らば鬼神の明うてうて邪正を
いひて婦人の情をりて人を憐れその論を飲つ竹をりて鬼神の徳
を稱さん夫鬼神の陰陽造化の迹を人よたれは父母なり死生を邪正
人の心善悪あり鬼神又邪正あり疫鬼疫鬼ハ邪神人れを攘ふ
れを祀るべしとれを祀る禱るの孔子曰。非其鬼而祭之論
也。論 哀公問於孔子曰。夫國家之存亡禍福信有天
命。非唯人也。孔子對曰。存亡禍福皆己而已。天災地
妖不能加也。孔子曰。然則由之天災地妖又禱る所ありん
疫鬼論ハ季路問事鬼神。子曰。未能事人焉能事鬼。
敢問死。曰。未知生焉知死。論 世俗人又事ををりて

鬼事んとし生をたざざりて身後の苦樂をりりりの惑ひ極まり子
貢問於孔子曰。死者有知乎。將無知乎。子曰。吾欲言
死之有知。將恐孝子順孫妨生以送死。吾欲言死之
無知。將恐不孝之子棄其親而不葬。賜不欲知死者
有知。與無知。非今之急。後自知之。孔子曰。聖人
の知と不知とを疑ふ亦不荒怪力亂神。祭如在。祭神
如在。神孔子曰。吾不與祭如不祭。論 聖人の鬼神を祭らり
佛をりての如くなり。佛人れを撰りて祭らるといふも祭
らざるが如くとり世俗の如くは祭祀祈禱の如くは後屠巫覡に任つる
てうれを祭らるといふんや事ると父母は事らるる重んばるる。孝女
あるるの大なるを祖先の墳墓に詣りて異國の鬼神に祭
る家廟の塵埃を拂りて邪鬼を祭らるるの唐山も五のりらるる

菅原胤孫の隨筆は痘瘡神といひて唐山もあり留青集の痘瘡神の社を建立する化縁の疏を載たりといひて私僕の俗習同病ありたる取捨に至るの愚かあるありとあり

二 蟬丸 附 廣 東

蟬丸の事世にありて其の諸説を考ふるに天行信景の説を以て據とせん欽塩尻云貫一を明石檢校と稱す其の氏將軍の親族なりと云ふ盲人感ありといふありて城才が猿宿雨の歌天聽は達しく夜雨と勅号ありと云ふ後小松院の勅賜なりと云ふ盲人の事書るありと云ふ光孝天皇の皇子明を失ひありて雨夜の皇子と稱すと云ふと帝紀を考るに光孝二十六年三月雨夜と云ふ皇太子ありて夜の皇子と稱す後小松帝を稱すありと云ふ先孝帝を小松の帝と稱すありと云ふ後小松帝を稱すありと云ふ

蟬丸を延喜帝第四の御子と云ふ類也近世第10の皇子ハ武部卿重明親王と云ふありて蟬丸ハ王子ト云ふありて引く蟬丸ハ唐の彈丸が目を撰てその名を以てを没せんと云ふを載たり彼餘書考とりありのいふ如くも考ありげし書考して世を欺たりといふその説と云ふ一ツと云ふ右書ありて況孟の齊を毒殺せしむるいふいふ虚言の慢は聖賢を誣たりその罪ありと云ふ草紙物語ありて雅俗ともいふ如く根を言と云ふいふありて損益ありて書いふありて欺きその説を信用し又物も書ありてその説を以ていふありて亦人を欺くの穢を醸するありて畢竟奇を好むの蔽あり人のいふいふと吾等もある異常ある汝盡書を信てい書るありて其の書いふありて書い博く覽てその善ありてを考問のありていふありて記して其の誠ありといふ

亦先達の類は蟬丸の盲人の書なりと云ふは後撰集 猿部 しの遠

坂の園の書の類書は相坂の室は庵室をほくそと住々々あたりの人を

えりしとあまの盲人の書なりと云ふは理の書に似たりと云ふ盲人

まればと云ふは人の足音をすまらぬと云ふは今も圓居する盲人の

てく人のあまの書なりと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

ま笑ふと云ふは蟬丸の盲目の書なりと云ふはと云ふはと云ふは

えりしと云ふは類書をきりて盲目の書なりと云ふはと云ふはと云ふは

○附くは関東の遠坂の関より東をきりて吸東と云ふは遠坂より東を

たるといふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

らるはいかりたりと云ふは博士なりと云ふは女房達なりと云ふは

らと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

相坂の関の書の類はと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

これ遠坂の関の書の類はと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

巻の五第に張りも云えたり亦同書は 三條院の皇女前齋定

内親 由道雅三位男 少のひ孫ひて世の人たる程ありと云ふは御

あつたゆりも云えたりと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

三 悪禪師

兼久元年正月廿七日將軍實朝公右大臣拜賀うらう鶴岡八幡宮
る夜別當阿闍梨公曉頼家の子石階のほろり又定規ひまたりう剣を抜て
公を犯しうらう世の人公曉を悪禪師と罵るなり蟠龍子俗説辨
それを辨しうらう君又讐不可與共載天公曉ハ出家人たり
久も實朝ハ父の讐をうらうれ宗よとべれよあまど世人情らど
増と悪禪師をうらうその名は負り凡智の決新浮薄の至ることあり
論理のよ似れんどもいふその理を極むとつべ接うらう東鑑云
久久元年七月十八日頼家於伊豆彼善寺被害于
時年二十三亦愚管抄うらうのふをうらう多時人せう頼家
を刺するうらうふどよりうらうの喉を絞王陰囊を投うらうを殺
ゆれば頼家卿を殺するの久時なり且らうは實朝のうらう十二歳
うらうや奸智の人うらうも父を殺すの毒計をうらうしめゆらう

公曉も亦父の讐をいふうらう強祿の中うらうの極をうらう
うらう加禰建保元年夏五月實朝みうらう和田多盛うらう北條を討
うらう時うらう中實朝をとりうらうらう和田が軍異合期でうらう
多盛一家滅亡うらうらうは實朝も又うらうらう北條をうらうらう
頼家も異うらうらうをうらうらううらう決うらうらうを害うらうらう且鶴
田拜賀の日身後の紀念うらう異の毛を抜うらう近臣一場うらうらう
うらう小祿が奸計を脱しうらうらううらうの死期をうらうらうらう
うらうの白石先生の読史餘論を觀てもうらう公曉ハ才淺く慮足らう
うらう多時うらううらうは實朝公を父の仇ありとらうあやまのうらう
運俗うらう父祖の箕裘を嗣んとらうらうらうらうの仍ひ考うらう
うらうの怒るの時政多時うらう謀うらう頼朝の統を倒とらうらう
朝の統をうらうの公曉うらうらう公曉も又罪あり天の垢うらうらう

る境の如く公曉ハ後時ニ移ると後時ハ家録ニ殺るる事也
是る所の世の人悪をりて公曉を殺る事ホウズル事也

四 正儀義隆 一休咏軒

正儀が南朝を去る義満の軍へ参りて誓の謀ありとの事
細く要記櫻雲記足利治乱記ありて云々櫻雲記ハ傳書ありとの事
井澤氏の取らば致細く要記ハ興福寺の真嚴僧正の記と云々
起建武元年正月止永永二年十月興福寺金堂の什物ありとの事
此の當時の實録ありとの事
應安二年 南方正平廿四年 正月南方 大将楠左馬頭

正儀種々謀ヲ獻ストイハ氏諸卿許容ナキ

以南方ヲウトンジ京師へ降参スベキヨシ内

肉相約スルノ由風聞此間畧

五月二日云云去ヌル四月中旬楠正儀終ニ去

ヲ變ジ入洛シテ新將軍ニ謁シ南方へ服従

ス其子正勝同正元ホハ南方へ忠義ヲ存シ

父ト不和ナリ云云和田和泉守マタ南方へ忠

ヲ盡シ正儀ト不和云云 此間亦畧

十二月上旬和田和泉守ト楠正儀ト不和既ニ

合戦ニ及ントス 此間亦畧

應安三年 南方改元建徳元年トス云云 十一月中旬南山ノ

勅ヲ受和泉守以下官軍數千人ヲ率

楠正儀マサノリが赤坂ノ城ヲ守マキテ攻セムル同下旬和田

孝タカガ武威イハ以テノ外楠ステニ敗北ハクホトド殆危オモウ以上細ニ

基マサノリより末應安七年の比マサカワマサモト和田正武楠マサノリ正儀マサノリを攻セムる

マサノリマサノリマサノリマサノリマサノリマサノリマサノリマサノリ

マサノリマサノリマサノリマサノリマサノリマサノリマサノリマサノリ

マサノリマサノリマサノリマサノリマサノリマサノリマサノリマサノリ

マサノリマサノリマサノリマサノリマサノリマサノリマサノリマサノリ

正平十四年北京應安二年正月楠正儀武家へ下降レ来と告フケ

同四月正儀ハ洛陽満ニ陽と

建徳元年十一月南朝の猛士和田某私云是則和田泉守正武也以下初オモ應オモ

軍兵を引率イソクし楠ヨウカイが要害セムマサノリを攻セム正儀武家マサノリ降マサノリる故コトを中ナカ景ミナト楠正儀マサノリ

南朝を皆死ナシムす武家降マサノリ来とて一イチ族チウハ正儀マサノリ行マサノリり送訓イソクを

柳ヤナギもとむりマモりマサノリ南帝ナンテイハ忠チウを勵ハカんと欲ホウするのコト此未コト畧マス

文安四年十二月云云南朝官自殺楠二郎ラホの勇士ユウシ既スニ敵テキを若干討ヲバク

捕トリ逐ツ了シ戦セン死シと以上榎雲エノクモ記

この後マサノリより細マサノリく要記マサノリとありとありマサノリの楠二郎マサノリとありマサノリの正儀マサノリが子カハ孫ハ

武マサノリ家マサノリが子カハ孫ハなりマサノリ亦マサノリ足マサノリ利マサノリ治マサノリ乱マサノリ記マサノリより

應安元年云云同二年正月二ハ將軍ヨシ茂シロ満ミツ幼女セウ

ナリトイヘ仁徳内ニ深キ故ニ南方ノ大敵楠

正儀等降参スベキ旨血書ヲ以テ依申細川右

馬頭ウマ頼ヨリ之キ赤松判官等ヲ南方へ遣ス四月ノ至トキ

二ハ楠正儀ハ洛シテ先細川頼之ノ宅タカへ向ムカテ

一禮シ則ニ献有テ其後頼之同道シテ將軍ヨシ茂シロ

満公ノ御館ニ参礼等アリ龍尾ト云フ太刀ヲ正

後獻ス將軍甚秘藏セリ以上足利治乱記

物ハのふつとんえたりあつるは蟠龍ハのうらうらうは戯曲を引く正儀が足利家

ハ降ニ系ニ可クしるは終ニつなれうを論ニでらるはつらるゆかうとの書ニともせえさ

まろるや千慮ハの一夫あるべし正儀が足利家ハ降ニりしと大塔宮の若宮陸

良親王の賀名生の奥銀嵩ハの親王ハ南帝を攻ニらんとしてるまう正

十五二月十八日の千載ハのゆは人をうて齒を切ニし明の謝肇淛が人の歌

類ハ天ユニられとも父子ハの肖ニたるありか樹ハ人地ハあれとも又子ハありあふ

しも相似ハどあれハ人作ハの天ユニまされるといひつと野ハあかり色世俗ハの常

言ハの親ハと似ハざる子を鬼ハといふ人と鬼ハといふ相類ハは然ハ又子の公氣相似ハざる

が如ハこの後鬼神論ハとあり考ハる

○脇ハ武部大補義治ハの嫡男相摸守義隆ハ法名行啓應永十

年四月廿五日相摸ハ陋底倉ハを封ニたりあつる鎌倉大草紙ハより息刑部

少補ハ一所ハ居ハありとせし故相別ハをうを以テ封ニたりと記ハりては刑部

少補と稱ハするものた少の義宗の嫡男貞朝ハの身をまうんやとて

義隆ハの再後才ハの息子ハあつると同書ハは應永三年の書ハのり小山若丸

一本大若丸ハの傳ハ非ハく貞朝ハの住人庄司清包ハを封ニる右新田義宗ハの息子

新田相摸守ハその後才刑部少補ハをううは大和とて白河邊ハ打ニつる

間上別武列ハよりと居ハる官ハの末葉ハ悉ハく馳ハありたりとありこの刑部少補

とのりの人ハを後才ハと記ハり後ハの息子ハといひ貞朝ハの朝臣ハの

あつるといふ貞朝ハの刑部少補ハを補ニたりといひ貞朝ハの朝臣ハの

嫡男ハより建徳二年ハ正五位下ハ越後守天授二年ハ後四位下ハのた少の

ありあつる亦義隆ハの建徳二年ハ正五位下ハ板摸守天授二年ハ後四位下ハ陸

奥守ハ右女御貞朝ハの拜任ハたりといひ彼義隆朝臣ハを鎌倉大草紙

後書ハ記ハる義隆ハの又後書ハ記ハる義則ハといふ陸ハの字ハの刻ハる子ハありといふ

白石先生の記されし一々のをりし義隆とありげし陸の字ハ人の名生り
稀々此本ハ之隆を陸と悞しとるるべし
貞方朝臣ハ應永十七年七月廿二日
千葉次兼胤於七里濱宝良寺 亦兼

倉大草紙又新田を以て宗朝王の子出家して兵部卿とて坂中と
いふ所を蟄居めしるるを勧めて還俗させ本名新田六郎とすりて
邊へ討つ出國中過半とすりて由良横瀬長尾但馬守持氏の地方と
し三月廿二日廿六日 應永廿 岩一と合戦と云云の末は新田六郎のゆゑに
事始りし持氏との叔父新御堂小路殿 并 倉持仲上叔禪秀

あり兼倉を追れ屢合戦して終に兼倉へゆりめられたる岩一と
治部大補滿純のゆゑに人の禪秀の督みありて法名を天用と号し
實ハ義宗の皇子とありて持國密に親むるとすといひ侍人あり

ハ新田六郎と滿純との兄弟なりと云ふ人の軍記ハ実録されど麓漏ふ
り考ゆぐとるるはるるを姑くとは抄し好古者流の考證を俟

因より南朝記傳ハ大徳寺の一休とゆめえしハ実ハ 後小松の皇子ハ
とされどハヤハ腹中よりあひく人臣の子とありて傍にありたま

院宣ありしハ和尙言葉ありて一首の秋を献る
常盤木ヤ本寺の梢の葉捨ててはけの園ありたま

らるるれどと記されたり南朝記傳ハ當時の實録とありて
つれづれのゆゑに之を後白石先生の評と味ひありらるるをけり

⑤ 八幡太寺

頼義朝臣の御子三人方郎を以て八幡宮の社壇とすて之を眼せしとあり

ありべり果しき如此なるん賀茂二郎新羅二郎之稱するも亦列は
縁故ありてありきゆに鎌倉管領二代記卷之四賢王丸之服の辰よ云持氏
の嫡子賢王丸殿之後の沙汰あり今の京都鎌倉確執を以て軍家子行
頼むべしゆもあらずとさればいふ八幡を郎義家の佳例に任せんといふ鶴が
岡の八幡宮と云は賢王丸を實前とあり加冠とあり義久と名ありひけ
云云とあれば義家當初八幡宮の神殿とてえ服とありて世人八幡を
郎と稱する疑ふべし人の稱号とてはこれと牽強附會の說をみるべ
し事を知りて不た田原の地とて傳と書し假字とありて藤原
秀郷龍宮へ越すとされども米の郷とありて傳を以てしつら世人傳を
と稱する一ち平記とあるなり又紀貫之の論語より一貫之といふ
聖語を以て名としたりは貫之の名の實定といひ一過冠を以て
ありて如此とて教とて貫之と更なるもの物とて定むる字は

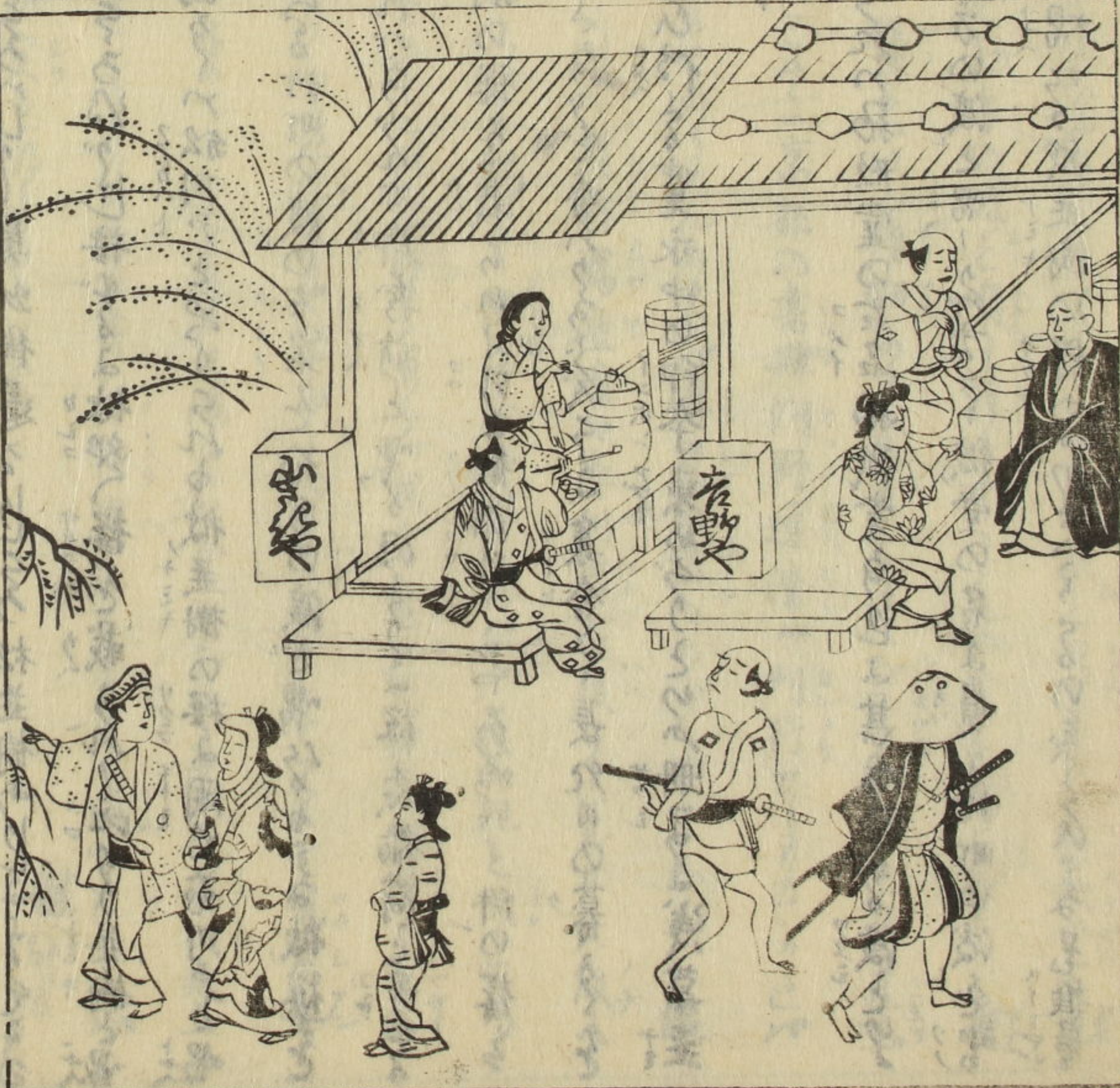
从正之よふふありてあるなりとされらるるありは
らど史傳は謗文あり記録は訛謬あり況小説野乘に至る事多
き係らざるものなり今より古史の擗りたるあり

六 浅草の事實

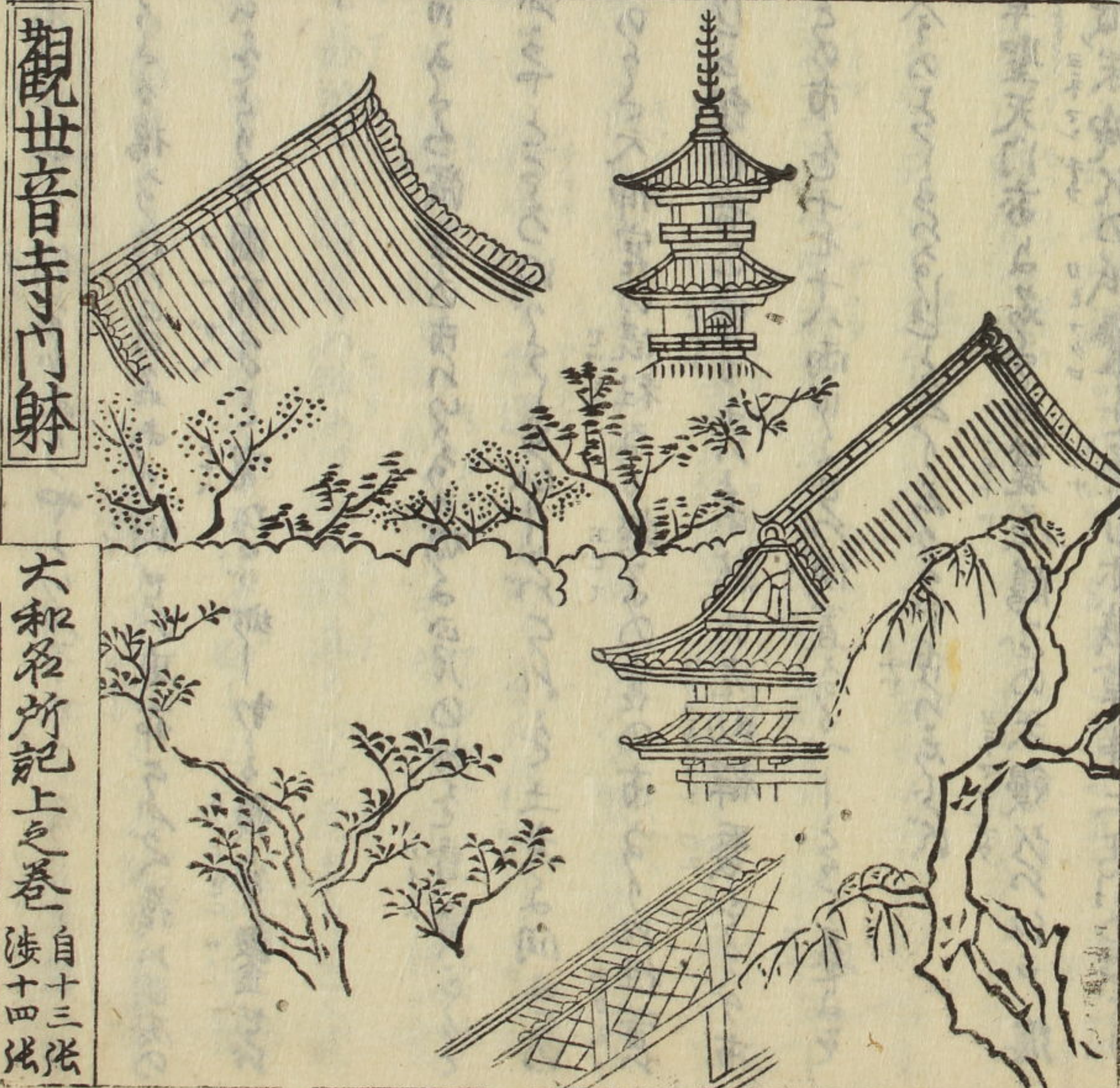
浅草の駒形堂むすの河のくを正面よりその圖説は戸名所記大和名所
濫水よりえたり 國のハモ
堂と題してむす此めさら川のく守追子の風帆をりて
此中より此堂をいふが堂のうけりやうとてらゆの堂と名けりといふ
この説らるゆに按じると當初の堂は浅草の親世音とありて繪馬
とくつとせんやと建て馬頭親音を安置したれば駒形堂と名けりたるは俚俗
の訛とて駒形堂と唱へたる致されれば戸名所記は駒形堂と記しなれば
留りしゆとゆりたるを再按じると竹町の渡を昔の花方の渡とゆりたる



●あまのついでに
 のちのちとていふは
 世にうらみなくとも
 かごやうなりきれは
 人の心もすまわら
 ざりては神様も
 うらみせあはれ
 らむと申すに
 あはれいげんあはれ
 まのいませハ二世
 らむといのりもせん
 あはれとてうらみ
 ちのせりてうら
 らむといのりもせん
 あはれとてうら
 らむといのりもせん



よりあまのついでに
 のちのちとていふは
 世にうらみなくとも
 かごやうなりきれは
 人の心もすまわら
 ざりては神様も
 うらみせあはれ
 らむと申すに
 あはれいげんあはれ
 まのいませハ二世
 らむといのりもせん
 あはれとてうらみ
 ちのせりてうら
 らむといのりもせん
 あはれとてうら
 らむといのりもせん



観世音寺門跡

大和名所記上之巻 自十三張 涉十四張

貞享の改より編笠次才よ止る一用は菅笠よりの云く菱川が画のよるの
頃の時勢雜り

⑦地名の訛譯

東鑑云。建長三年二月六日。武藏國浦草寺。如牛者
忽然出現。奔走于寺。于時寺僧五十。許食堂之。自
集會也。見件之怪異。廿四人。立所受病。進退不成。果
風。七人即座。死。曲亭子云。この後より。後世好事者。高師の牛嶋
ハ牧牛の如き。妙き。此の如き。と云。この牽強附會の説あり。この牛
御前の神社を。一御の領守と云。この牛嶋と留る。人。此の牛嶋
毛蟲の牛嶋の如き。大人の長あつた。と云。この東鑑と云。此の如き。説を
あつた。と云。牛嶋前。牛天神の牛嶋。昔まう。大人。御前。大人。天神。あり。と
古人も考あつた。と云。

江戸破子の説も亦訛まり。築土の神の事。ごもら。産砂よ。と云。此の事。築土

考一篇を著。さ。や。と。と。か。も。事。長。り。れ。が。ら。よ。贅。せ。ん。築。土。を。お。門。の。袖

矣。と。云。う。ら。ん。も。う。ら。る。ゆ。わ。う。道。灌。の。清。和。源。氏。之。位。入。道。頼。政。卿。の。藩。之。且。之。主

は。扇。谷。定。正。ゆ。は。藤。原。姓。と。あ。れ。り。平。氏。乃。お。門。の。灵。を。あ。り。て。城。隍。廟。と

と。い。ふ。も。あ。ら。え。ど。例。に。お。門。の。灵。の。後。よ。あ。り。て。あ。る。の。歌

○本御の圓山といふ所の古名。藤原の丸山といふ所の豊嶋平塚。藤原の佐の丸

一。族。よ。う。ら。り。の。事。を。い。ふ。は。藤。原。大。草。紙。を。い。ふ。も。あ。ら。う。今。約。述。の。あ。ら。う。小。草

源。明。神。乃。り。但。多。塚。と。い。ふ。の。事。を。い。ふ。は。四。段。を。い。ふ。は。大。塚。の。廻。國。雜。記。よ。り。え。え。と

今。よ。り。此。名。を。存。せ。れ。ば。あ。ら。う。今。の。丸。山。の。事。の。圓。塚。と。い。ふ。後。よ。り。名。を。更。め

ある。と。い。ふ。事。を。い。ふ。は。い。ふ。事。

⑧四時代辭

百年前の事。いふに。神。は。い。ふ。の。事。を。い。ふ。は。取。前。よ。り。説。り。の。事。を。い。ふ。は。我。の。推。量



三尊の佛

細工物宝目録

此の佛の如く... 細工物... 宝目録... 右の如く... 左の如く... 右の如く... 左の如く...



三尊の佛

菩薩の如く

天衣の如く

菩薩の如く

天衣の如く
菩薩の如く
菩薩の如く

不動明王

不動明王の如く... 不動明王の如く... 不動明王の如く... 不動明王の如く... 不動明王の如く... 不動明王の如く... 不動明王の如く... 不動明王の如く... 不動明王の如く... 不動明王の如く...

観音菩薩

観音菩薩の如く... 観音菩薩の如く... 観音菩薩の如く... 観音菩薩の如く... 観音菩薩の如く... 観音菩薩の如く... 観音菩薩の如く... 観音菩薩の如く... 観音菩薩の如く... 観音菩薩の如く...

目連の像

目連の像の如く... 目連の像の如く... 目連の像の如く... 目連の像の如く... 目連の像の如く... 目連の像の如く... 目連の像の如く... 目連の像の如く... 目連の像の如く... 目連の像の如く...

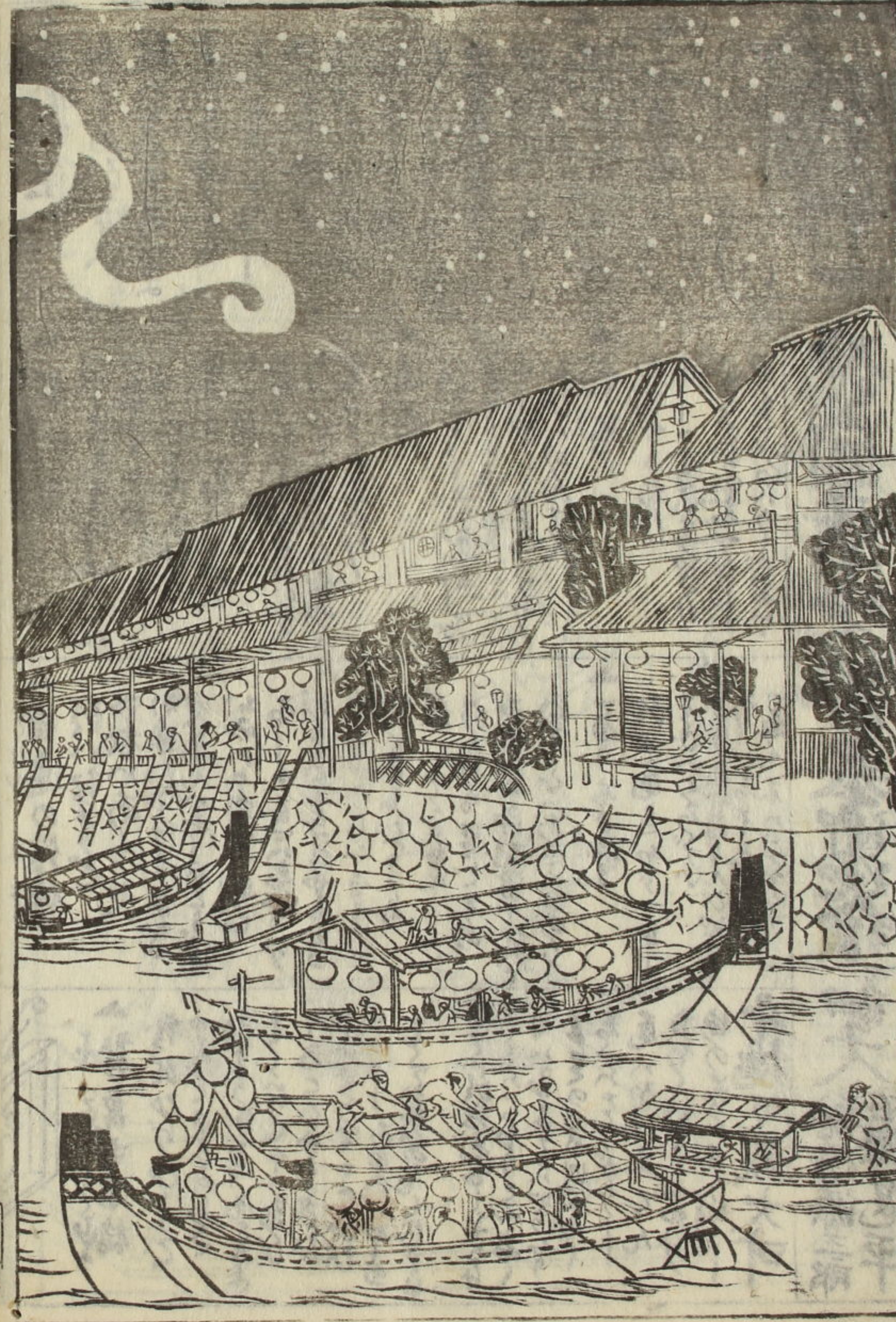
勢鬼古本梅

勢鬼古本梅の如く... 勢鬼古本梅の如く... 勢鬼古本梅の如く... 勢鬼古本梅の如く... 勢鬼古本梅の如く... 勢鬼古本梅の如く... 勢鬼古本梅の如く... 勢鬼古本梅の如く... 勢鬼古本梅の如く... 勢鬼古本梅の如く...

右兩國橋小路の如く奉納の佛

細工 簀橋源三郎 古澤甚平

安永七年戊戌六月出



浮繪東都中洲夕涼之景

北尾政美画板元通油町

鶴屋喜右衛門
葛屋重三郎

こころ今もつりもつりゆりゆりたすまされりよよもつりゆりゆり
少なり今按さる塩の俗の省文その由未久亦鹽の古字鹽也爾
必右子必ひ血はゆの後鹽は作正字通云俗省作鹽篇海舉要引
作鹽鹽然非めんは鹽の土よゆ俗體といへども篇海舉要に載す
とれはわつらげの杜撰であらうと大約我俗もなかりの必草より入る故
生涯字を識りの稀と予毎歲著述の稿本をりる筆工は清書を任
と常々怪りゆの魯魚馬吏帝のさる久予予且且卿郷鐘鍾木の
數字を恥ひ直し必ひ心よゆの且その字心部よゆりるるる俗の恥作
玉篇耳部の未よゆれを載し俗恥とはと字も雅俗の両體あり蒙
師よりこれをあぶれ恥以恥を傳ると久し盲象盲をいじやゆん
○草ハ楷より出ツ楷ハ隸より出ツ隸ハ篆より出ツ舊説は必字於草草
と云ふ當初これを漏る致我俗おを於の草といはれおの村字の草
亦指を揃の草とい非は指ハ樹の草も亦を貴の草とい非は中央の草
なり場素の既久く容齋嘗字體を論し省文を説文の本まう
と云ふ俗考云今人作字省文以禮為礼以處為処以與
為方凡章奏及程文書冊之類不敢用然甚實皆
文字本字也許叔重釋礼字云右文処字云止也得几
而止或從處方字云賜予也方與同然則當以省文
者為正

○洪邁云今文人受用不識一丁字組唐書挽兩石
○法邁云書字有俗體一律不可復改者如冲涼况滅
決悉以水為筆筆陵切一也雖士人札翰亦然玉篇正收入
於水部中而部之末亦存之而皆注云俗乃知由
未久矣唐張參五經文字以為說
○洪邁云今文人受用不識一丁字組唐書挽兩石

不^レ知^レ識^ル一^レ丁^ノ字^ヲ出^ル處^ヲ考^ル之^ヲ乃^チ个^ノ字^ナ非^ズ丁^ノ字^ニ按^テ續^セ世^ノ說^ニ
書^ス此^ノ个^ノ字^ヲ蓋^シ个^ト與^ト丁^ト相^シ全^シ傳^ハ寫^シ謬^ス焉^後又^シ觀^テ張^ノ翠^ノ微^ノ
考^ハ異^ナ亦^レ謂^フ个^ノ字^乃知^ル世^ノ說^之言^ヲ為^シ信^ト又^シ觀^テ蜀^ノ志^南史^ノ
畜^ハ有^ル所^レ識^ル不^レ過^シ十^ノ字^之語^也世^ノ通^テ謂^フ王^ノ平^ノ所^レ識^僅通^シ十^ノ
字^一恐^ラ是^十字^亦未^タ可^レ知^ル十^ト與^ト丁^ト字^又相^シ似^{タリ}其^ノ文^亦有^ル
據^也與^テ淮^ノ南^ノ子^言宋^ノ景^ノ公^熒惑^徒三^ノ舍^之謬^同史^ノ記^ス
謂^フ二^ノ度^ト俗^考

由^テ亭^子云^書を觀^ルと難^クもあ^らうれ一^畫一^点を認^ラら^ざるとい^ふもな^らず
よ通^シ易^クい^ふ況^シ个^を悟^ラず^と或^ハ十^と人^とあ^らざる^も學者^者終^ニ悟^ラら^ざる^も
ラ^レを受^テ續^クその^義を^遠今^ノ學者^ハ只^ニ文字^を識^ルを^要と^ス
あ^られ^ばその^文を^識易^クなる^も事物^ノ如^ク
○唐^ノ蕭^ノ灵^不識^字常^以伏^臘為^伏臘^又一^日張^九齡^送

羊^ノ刺^ニ稱^テ蹲^鴉蕭^以為^鴉鴉^答云^損羊^拜嘉^惟蹲^鴉味^也
耳^ノ僕^家亦^不願^見此^惡鳥^也九^齡得^書大^笑
事物^異名^羊曲^亭子^云唐^山ノ^文華^ノ酒^{あり}あ^られ^ばも^筆文^旨ま^り
水^滄傳^ノ載^と不^ノ魯^知深^李達^亦絶^一字^を識^ら原^是寓^言と^ス
い^ふも^の俗^をあ^らは^す天^朝靖^治ら^ば二^百年^村落^山野^も又^文を^識
よ^きく^らい^實は^是昇^平ノ^餘澤^{なり}
○今^見女^輩書^を觀^ルと^を好^めり^あら^れば^も個^字を^{その}傷^に施^{され}ば^も
違^フる^所と^判別^の書^藉ハ^書肆^品利^の内^にあ^らる^も字^と傷^刻を^と
ま^らず^しと^閱者^品傷^刻の^を觀^テ本^文を^読む^故に^読む^字體^を
と^忘れ^る生涯^文義^を悟^らず^られ^ば傷^刻を^刪去^して^は讀^んだ^られ^ば
を^讀む^は文^義を^解す^るに^足ら^ず古^人文^字を^取り^て文^を作^らる^のこと^を
ゆ^ゝか^らず^あら^はす^{文章}ハ^和漢^ノ差^別あり^しもの^あら^ざる^も漢^ノも^あら^ざる^のの^國

今^見女^輩書^を觀^ルと^を好^めり^あら^れば^も個^字を^{その}傷^に施^{され}ば^も
違^フる^所と^判別^の書^藉ハ^書肆^品利^の内^にあ^らる^も字^と傷^刻を^と
ま^らず^しと^閱者^品傷^刻の^を觀^テ本^文を^読む^故に^読む^字體^を
と^忘れ^る生涯^文義^を悟^らず^られ^ば傷^刻を^刪去^して^は讀^んだ^られ^ば
を^讀む^は文^義を^解す^るに^足ら^ず古^人文^字を^取り^て文^を作^らる^のこと^を
ゆ^ゝか^らず^あら^はす^{文章}ハ^和漢^ノ差^別あり^しもの^あら^ざる^も漢^ノも^あら^ざる^のの^國

字をとりて傍刻を施すなりと云ふれば雅俗ともよこれを讀む一字
音の漢字よりとりてそののりあるれど中葉より音訓をさしつゝ俗の音と
漢混雜の文ありされば俗の音と解し易りて文一変して漢を
合するものありと云ふなり

○近属醫師のさつり本草に誘ふものありり患者禁好物を録し
人を遣はされを同のさつりハクあり河豚の和訓をフクと云ふ
俗人音を借りて鰻は俗の醫師をさつりて續くアビと云ふを
行せりが患者飲びてさつり河豚を食ふ行ふその夜果て死せりと云
俗人の鰻の河豚あるをありて鰻の石決明ありと云ふ鰻のハク
石決明ありと云ふ俗の河豚あるを悟りて鰻の意に鰻の一をさし
雅俗あるをさつりて人を殺さる河豚をさつりて鰻と稱するは世間の
類のさつり

本草綱目介之ニ云ク石決明釋名九孔螺華殼
名千里光時珍曰決明千里光以功名也九孔螺
以形名也集解弘景曰俗云是紫貝人皆水漬蟹
鰻頗明又云是鰻魚甲附石生大者如手明燿五
色内亦含珠恭曰此是鰻魚甲也附石生形如蛤
惟一片無對七孔者良今俗用紫貝全非云云和
名鮑云鰻四聲字苑云鰻鮑音抱和崔禹錫食經云石決
明亦五雜俎云鰻音撲声今人誤為鮑也韻
譜云一名石決明一殼如笠黏石上陶中有之但
差小耳又乃彙集延喜式本云鰻の作る石決明なり今俗鰻を
讀く不具と河豚魚は當りのその純最甚し

○今の生薬舗皂角刺を焼く皂角刺と云うれ皂角子と同音ある故に
混びたりんぬり俗子の用ひるの故に俗なり

○神巻説苑は灸一炷を一壯と云ふ壯年の人より灸の灸と定めたるは
壯といふよりよりたるものよりたるものなりと云ふは其数を減する
沈存中が筆談より云えたりと云ふ思按ぶるは壯の壯と同音
あり正字通は熨熨註音壯火貌熏蒸也。今炊粉蜜謂之
熨。糕一説陸佃曰。醫用艾灸一炷謂之壯俗因作熨
熨糕。説苑云云亦方書は往く灸灸熨は作を云ふは其の壯年
の壯を象りたるを云ふは壯熨とも云ふ熏蒸の義あり壯年
に灸治は灸壯と唱りたるは老人より灸灸と云ふべし艾の老を老人
に灸治と唱りたるを云ふは灸一壯の壯は壯年と當りたるは灸治
に灸治と唱りたるを云ふは灸一壯の壯は壯年と當りたるは灸治
に灸治と唱りたるを云ふは灸一壯の壯は壯年と當りたるは灸治

○葉の親の首文あり古の喜の首文あり他は首文あり見の首文あり
凡の鳳の首文あり福の麗の古文あり小刺金石録全傳より云えたりと
唐山の俗有欲録より云えたり遺忘は海あり

○我俗燈花の子を結ぶりのを云ふ丁子頭と云ふ接ぶるは丁も又燈あり
五雜俎云閩方言以燈為丁。每添一燈則俗謂之添丁と云
又書言故事生子自云添丁。唐盧仝生子名添丁。欲為
個持役也。韓文公寄盧仝詩。去年生兒名添丁。云云
又添丁の民丁の丁は五雜俎より添丁と同く云ふは通云隋文帝
新令一男女十八歳以上為丁。以後課役云云と云ふはこれ
我俗燈花を祝して丁子と云ふは唐の俗燈花を祝して最甚
報今朝在喜鵲噪。とのりも同く唐の俗燈花を祝して最甚
廬江王夫人嘗燈花白一篇を著りたるの略も云ふは乾鵲噪。而

あまのりく^{ニクシ} 思^シ 孫^ミ はあ^ハ ん^ン のり^ニ 悔^{クハ} ろう^ウ ん^ン づ^ツ ち^チ ろ^ロ のり^ニ 思^シ ぶ^ブ も^モ 勉^{ケン} ら^ラ せ^セ ん^ン と
ち^チ ろ^ロ のり^ニ 思^シ ぶ^ブ も^モ 勉^{ケン} ら^ラ せ^セ ん^ン と

○[○] り^リ ー^ー

あまのりく^{ニクシ} 思^シ 孫^ミ はあ^ハ ん^ン のり^ニ 悔^{クハ} ろう^ウ ん^ン づ^ツ ち^チ ろ^ロ のり^ニ 思^シ ぶ^ブ も^モ 勉^{ケン} ら^ラ せ^セ ん^ン と
ち^チ ろ^ロ のり^ニ 思^シ ぶ^ブ も^モ 勉^{ケン} ら^ラ せ^セ ん^ン と

妻石雜誌卷之三

